

歴史データをつなぐこと

－目録データ－

山田太造（東京大学史料編纂所）

1. はじめに

大辞泉によれば、目録とは「書物の内容の見出しをまとめて記録したもの」、または「所蔵・展示などされている品目を整理して書き並べたもの」と説明されています。前者は書物の目次、後者はカタログに相当すると考えられます。書物の目次は文章の見出しだけではなく、文章へアクセスするための手段としても利用することができます。カタログにはその中に書かれている品目を一覧する役割も担っています。つまり、目録は記されている内容を識別し、それぞれに対してアクセスする手段を提供しています。これは目録に示されているモノが何であっても変わることはないと考えられます。

さて、ここでは目録の対象として歴史データを考えます。歴史データといっても、古文書・古記録のような文献資料もあれば、刀剣や鎧といった武具を含むモノ資料もあります。また「織田信長」「坂本龍馬」といった人名、「うさのくにいんぼぐん総国印旛郡」のような地名、「ぶんきゅう文久3年3月7日」のような日付なども歴史データとして位置づけられます。文献資料ですと、その内容、つまりは本文も歴史データになりますし、書かれた文字も歴史データになります。昨今では画

像・音声・動画を含むデジタルデータも歴史データとして扱われます。このように多様な歴史データが存在します。これらの歴史データにアクセスできる手段として目録があるとも考えることができます。

2. 目録を整理していく

扱うモノを登録していくことで目録が作成されていきます。ただし、無秩序に登録していくと扱いづらくなります。例えば、探したいものがあるかどうかを確かめたい場合、登録された内容を1件ずつ確認していくのは非常に効率が悪いです。また、ほかのモノとの違いがわからないと扱いづらくなります。さらに、目録の対象となっているモノにアクセスできる状態になっている必要があります。そのため、管理の実態に合わせて目録を作成していくことが必要です。モノを分類するなど整理しておき、その整理状況に応じて目録を作成していくことになります。同じ性格の書物を近くに配置したり、目的に応じてフォルダを作成してファイルを配置したりと、皆さんの書棚の整理やPC内のファイル整理と同様です。

これは歴史データでも変わることはありません。対象を整理し、その整理の実態に応じて目録を作成していきます。これ以降、東京大学史料編纂所における歴史データを例に説明していきます。

3. 東京大学史料編纂所所蔵史料

東京大学史料編纂所（以下、史料編纂所）は、日本の古代から明治維新期に至る前近代の日本史に関係する歴史資料（以下、史料）を研究する大学附置研究所です。史料の調査、収集および分析を行い、『大日本史料』『大日本古文書』『大日本古記録』といった日本史の基幹となる史料集を編纂・公開しています。史料編纂所では、『大日本史料』のような事件が起きた時間の流れに沿って関連史料を集める編年史料と、『大日本古文書』や『大日本古記録』のような史料群の構成と内容を精密に復元する編年史料のふたつの編纂

を行っています。史料集の編纂・公開は1901年に『大日本史料』6編1（1333年、建武の新政開始）、『大日本史料』12編1（1603年、江戸幕府開府）、『大日本古記録』編年文書（702年以降の編年古文書集）の3冊を出版して以降、現在まで120年近く継続しており、1100冊以上の刊行に至りました。

史料研究および史料集編纂を支えるためには、史料そのものがが必要です。日本史史料は日本だけでなく海外にも所在しています。史料編纂所では、日本全国・世界各地に史料調査に出掛け、注目すべき史料について複製を行い、史料集編纂のための素材となる史料を収集してきました。このような作業を史料採訪と呼んでいます。史料編纂所の発足当初より、影写（敷き写し）、謄写（見取り写し）、模写という技術を用いて収集を行ってきました。1970年以降からはマイクロカメラによる撮影、2010年以降はデジタルカメラを用いた撮影により収集を行っています。さらに、寄贈・移管・購入などによって受け入れた多数の原本・写本類を所蔵しています。国宝・重要文化財に指定されたものや、まとめて伝来した史料群（特殊蒐書）など多くの貴重書もあります。図1は史料編纂所が築き上げた日本史史料コレクションの概要を

| | |
|---------------------------------|-----------|
| ●図書(版本を含む) | 206,649冊 |
| 内、和漢書 | 198,453冊 |
| 洋書 | 8,196冊 |
| ●史料(原本・写本類) | 200,355点 |
| (国宝1件、重要文化財17件、特殊蒐書63件及び貴重書を含む) | |
| ●本所作成史料 | 117,875点 |
| 内、影写本 | 7,105冊 |
| 影写本(複製本) | 4,500冊 |
| 謄写本 | 22,705冊 |
| 写真帳(レクチグラフを含む) | 45,872冊 |
| 台紙付写真 | 23,222点 |
| 模写・拓本 | 4,583点 |
| 稿本 | 9,845冊 |
| 模造 | 36点 |
| 古写真 | 7点 |
| ●逐次刊行物 | 3,118種 |
| 内、和雑誌 | 2,830冊 |
| 洋雑誌 | 288種 |
| ●フィルム類(複製本を含む) | 66,990点 |
| 内、マイクロフィルム | 49,924リール |
| シートフィルム | 8,066タイトル |
| 乾板 | 9,000枚 |
| ●電子出版物(ビデオテープを含む) | 840タイトル |

図1 東京大学史料編纂所所蔵史料概要（2016年3月31日時点）

示しています。

4. 史料を分類していく

膨大な日本史史料コレクションを築き上げた結果、史料を1列に並べる、または書架などに単に配置していきただけでは管理しきれなくなりました。そのため体系的な分類が必要になりました。

図書の世界では、図書の主題や内容に基づいて分類するための図書分類法が存在します。国際十進分類法 (Universal Decimal Classification; UDC)、デューイ十進分類法 (Dewey Decimal Classification; DDC) などがあり、特に日本では日本十進分類法 (Nippon Decimal Classification; NDC) や国立国会図書館分類表 (National Diet Library Classification; NDLC) などが利用されることが多いです。

史料編纂所の日本史史料コレクションは史料編纂所図書室にて管理されています。図書室ですので図書分類法を用いて管理したいのですが、歴史、しかも日本史に偏ってしまうため、これらの図書分類法をそのまま用いることができません。そこで、十進分類法での分類モデルをベースに史料編纂所における史料収集の活動に基づき史料を分類しました。この分類表を図2に示します。まずは原本史料かそうでないかで分けています。原本史料は区分000に分類されます。写本類は写本作成の手法によって影写本 (史料区分300)・謄写本 (史料区分200)・その他の写本 (史料区分400) に分けられます。またマイクロフィルム、写真帳 (史料区分610-630)、デジタル化された史料 (史料区分B00、D00、D10 および D690) のように写真技術の手法に応じて分類します。史料採訪での撮影によるもの (史料区分M10)、海外関係のもの (史料区分690)、寄贈されたもの (史料区分M20 および M40) のようにマイクロフィルムの性格に応じて分類しています。所蔵史料のうち一括して伝来した史料・図書、あるいは内容に特色のある個人の蒐書などは“特殊蒐書”と呼んでおり、その史料群の体系をそのまま管理しています。例としては、国宝『島津家文書』 (史料区分 T18) や重要文化財『近藤重蔵関係史料』 (史料区分 T34)、『江

| 区分 | 区分内容 | 区分 | 区分内容 |
|---------|--|---------|---|
| 000 | 原本・古写本類(0架) (原物史料,古写真,模写,台紙付写真,拓本,模造史料) | 700-740 | 外国語史料図書 |
| 100 | 刊本 | 750 | 写真帳(外国語) |
| 200 | 謄写本 | 760 | レクテグラフ(外国語) |
| 300 | 影写本 | 770 | コピー版帳(外国語) |
| 400 | 写本 | 800 | 辞書・事典 |
| 500 | 刊本・特殊形状本 (卷子本,冊子本,小型本,大型本,特大本,極大本, 箱入本,軸物・量本,標本) | 820 | 欧文辞書 |
| 610-630 | 写真帳 | 850 | 本所出版物 |
| 640 | コピー版帳 | 870 | 本所稿本類 |
| 650 | デジタル媒体 | 800 | ポーンデジタル |
| 651 | ビデオカセット | D00 | デジタル資料 |
| 652 | ビデオカセット(貴重書庫) | D10 | 探訪デジタル資料 |
| 653 | デジタル媒体(貴重書庫) | D690 | 在外デジタル資料 |
| 660 | レプリカ | M00 | マイクロフィルム(日本語) |
| 670 | マイクロフィッシュ | M10 | 探訪マイクロフィルム |
| 680 | レクテグラフ(日本語) | M20 | 寄贈マイクロフィルム(運用掛扱い) |
| 690 | マイクロフィルム(海外関係史料) | M30 | シートフィルム |
| | | M40 | 寄贈シートフィルム |
| | | T00-T65 | 特殊蒐書 (旧造兵学科所蔵史料,徳大寺家本,外務省引継書類,遠藤正義氏寄贈史料,宗家史料,維新史料引継本,島津家文書,益田家文書,内務省引継地図...) |

図2 東京大学史料編纂所所蔵史料の分類表

『戸幕府儒官林^{ほやしけ}家関係史料』(T39)などがあります。

5. 目録を階層化していく

原本であっても一点ごとに古文書が管理されているものあれば、手鑑^{てかがみ}(古文書などを張った折本装の冊子)や卷子^{かんす}(いわゆる巻物)のように複数の古文書が含まれているものもあります。それらの一点ごとの古文書・手鑑・卷子などが箱に入っていたらその箱も管理の対象となります。Aという書架に配置されているBという箱のCという卷子にあるDという古文書、というのはよくある管理パターンです。この点でモノとして一般的な図書とは異なります。史料、というよりも実際には公文書などのいわゆるアーカイブの目録記述手法としてISAD(G)(General International Standard Archival Description)が国際アーカイブズ評議会(International Council on Archives)により策定され、その第2版であるISAD(G)2ndが国際標準として位置づけられています。ISAD(G)2ndでは目録階層を表現するためモデルとしてフォンド配置レベルモデル(Hierarchical model of the levels of arrangement for the fonds)が導入されていま

す。このモデルでは、階層の上位から、フォンド (fonds)、シリーズ (series)、ファイル (file)、アイテム (item) があり、これらで史料目録が構成されます。フォンドは最上位に位置します。アーカイブの総体として位置づけられます。アイテムは管理上での最小単位です。シリーズとファイルは難しい概念です。一言でいうと、シリーズは団体などでのある活動により生じた史料全体、ファイルは扱う上での基本単位となります。フォンドとシリーズは目的などに応じてその下位階層としてサブフォンド (sub-fonds)、サブシリーズ (sub-series) を設けることができます。フォンドとファイルは必須ですが、シリーズとアイテムはなくても構いません。よってフォンドの直下にファイルを置くことが可能ですが、フォンドの直下にアイテムを置くことや、フォンドとシリーズのみで構成することはできません。

史料編纂所蔵『島津家文書』を例に ISAD(G)2nd に従った史料目録を見てみましょう。図3は島津家文書の黒漆塗特二番箱くろうるしぬりとくにばんばこに関する目録です。黒漆塗特二番箱れきだいきかんに歴代亀鑑 (53 通) と呼ばれる手鑑など 11 の史料があり、歴代亀鑑 (53 通) は元暦 2 年から康永 3 年の古文書 53 通 (16 番目の書状にはふたつの古文書が収載されていることから、古文書の点数としては図3に示す通り 54 点となることに注意) が収載され、そのひとつ目の古文書の名称が源頼朝下文くだしぶみです。この階層構造から、

- シリーズ：島津家文書
- サブシリーズ：黒漆塗特二番箱
- ファイル：歴代亀鑑 (53 通)
- アイテム：源頼朝下文

として目録を作成することができます。フォンドは史料編纂所所蔵史料になります。アイテムは最小の単位としての古文書 1 通を指し、それをファイリングしてある歴代亀鑑 (53 通) がファイルとなります。シリーズは島津家文書としてあります。これは先に述べた史料編纂所所蔵史料目録の分類表に基づいた区分に相当します。さらに階層ごとに識別できる番号を与えま

| 種別 | 番 号 | 内 容 | 形態 | 数量 |
|----------|-----|------------------------|----|----|
| 黒漆塗 特二番箱 | 1 | 1 歴代亀鑑 元暦2～康永3 | 帖 | 54 |
| | 1 | 2 歴代亀鑑 貞和4～天正15 | 帖 | 54 |
| | 1 | 3 国統新亀鑑 慶長4～寛永14 | 帖 | 33 |
| | 1 | 4 御譲状置文 | 巻 | 22 |
| | 1 | 5 御外祖御譲状 | 巻 | 8 |
| | 1 | 6 薩州日州凶田帳 建久8 | 巻 | 1 |
| | 1 | 7 台明寺文書 建仁2～慶長6 | 巻 | 11 |
| | 1 | 8 御文書古目録 | 巻 | 5 |
| | 1 | 9 台明寺文書 応保2～文和3 | 巻 | 16 |
| | 1 | 10 頼朝公御教書 文治5 | 巻 | 1 |
| | 1 | 11 頼朝御教書之句解 薩摩守源綱貴(島津) | 冊 | 1 |

図3 島津家文書 黒漆特二番箱 (T18-1) 収載史料

す。例えば、島津家文書はシリーズレベルで T18、黒漆塗特二番箱にはサブシリーズレベルで 1、歴代亀鑑 (53 通) にはファイルレベルで 1、源頼朝下文にはアイテムレベルで 1 を付与しています。よってここでの源頼朝下文には“T18-1-1”という識別子^{しきべつし}が与えられ、これにより史料編纂所所蔵史料全体の中からこの古文書にアクセスすることができます。また、歴代亀鑑(53通)の識別子は“T18-1-1”となります。このように管理している史料に対してアクセス手段 (finding aid) を与えることが ISAD(G) を用いる重要な理由と考えられます。このように史料編纂所では所蔵史料目録を階層化し、識別子を与えていくことで、所蔵史料目録データベース (Hi-CAT) を構築しています。

ISAD(G)2nd はアーカイブの階層化およびそれぞれの階層での記述項目をモデル化しています。データベースで検索し閲覧するために、実際に計算機で扱うためのデータとして記述していく必要があります。記述の国際標準としては EAD (Encoded Archival Description) があります。2018 年 10 月時点では EAD3 Version 1.1.0 がリリースされています。EAD3 では XML (Extensible Markup Language) による記述が可能です。EAD を採用した国内の機関としては国立公文書館があります。

6. 目録を記述する

ここでは史料目録の記述について考えていきます。先にあげたように

名称と識別子があります。ほかにはどのような項目があるでしょうか。ISAD(G)2nd では記述要素は下記のように7つの領域に分けられています。

- 識別領域 (identity statement area) : 識別子 (参照コード)、名称、日付など
- 状況領域 (context area) : 作者、履歴、管理情報など
- 内容・構造領域 (content and structure area) : 範囲、内容、配置情報など
- アクセス・利用条件領域 (conditions of access and use area) : アクセス条件、状態、言語、物理的特徴など
- 関連史料領域 (allied materials area) : 原本や写本の存在や所在、関連史料群など
- 注釈領域 (notes area) : 史料に対する注釈・備考・注記
- 記述管理領域 (description control area) : アーキビストによる注釈・備考、記述自体の日付など

史料をアーカイブしていくためにはこれらの要素すべてを記述していくことは重要ですが、実際には難しい場合もあります。識別子、名称、配置情報などはアクセスしていくために必ず必要となりますし、管理していく上でも必須ですので、確実に記述することになります。物理的状态(数量、大きさ、重さなど)も記述しやすい項目です。しかしながら作者や日付はわからないことが多々あります。また内容に関わる記述は内容把握しなければ書きにくいです。また、典型的な古文書における宛所^{あてどころ}(いわゆる、宛先)のように、これらの以外の要素についても記述したいことがあります。一応、これらを備考として記述することもできますが、あくまでも備考であることから宛所として利用することは難しいかもしれません。また、年号がない^{さし}、差出^{だし}(古文書の作者)の名前が花押のみ、^{かおう}というように史料を深く読解しなければ記述できないことも多々あります。史料について把握し得る要素は史料によって、さらに所蔵しているところによって変わり得るため、確定的に設定することは大変難しいです。そのため実際には、対象である史料について、ISAD(G)の各項目をテンプレートとして利用し、拡張もしくはカスタマイズ

し、把握できるデータをできる限り記述していくことになります。

先にあげた『源頼朝下文』（T18-1-1-1）を例に目録データを見てみます。これは島津家文書－黒漆塗特二番箱－歴代亀鑑（53通）という階層構造であり、この階層構造はISAD(G)2ndに従って記述していくことができました。図4に示すように、各階層での記述もISAD(G)2ndの記述項目をカスタマイズして記述しています。これは東京大学史料編纂所データベース検索サービス（以下、SHIPS DB）における所蔵史料目録データベースに実際に格納されているデータです。

| | |
|---------|--|
| ◀書目データ▶ | |
| 【書目ID】 | 00104312 |
| 【史料種別】 | 貴重書（特殊蒐書） |
| 【請求記号】 | S島津家文書-1-1 |
| 【書名】 | 歴代亀鑑(五三通) |
| 【著者名】 | |
| 【出版事項】 | |
| 【形態】 | 手鑑, 1帖 |
| 【大きさ】 | 44.5×64.7×6.0cm |
| 【注記】 | 【国宝：平成14年度指定】表紙：紺地梅牡丹菊花折枝文銀欄、角金具(桐唐草文真鍮)付。備考：平成9年度重文指定。 東京大学史料編纂所影印叢書1『島津家文書：歴代亀鑑・宝鑑』（8500-112-1）所収。 |
| ◀細目データ▶ | |
| 【史料名】 | 源頼朝下文 |
| 【注記】 | 体裁：竖紙。頁数：1通。法量：30.5×48.2cm。紙数：1紙。宛所：伊勢国波出御所。島津番号：1-1-1。 マイクロフィルム：Hdup.M-23「島津家文書マイクロ版集成【No.島津】」リール番号1-開始コマ6 |
| 【和暦年月日】 | 元暦二年六月十五日 |

図4 源頼朝下文の史料目録データ

7. 記述要素を拡張していく

Web上で流通・共有していくことを目的とした語彙セットとしてDCMI Metadata Terms、いわゆるダブリンコア（Dublin Core）が有名です。DCMI Metadata TermsはDublin Core Metadata Initiativeにより提唱され、策定が進められてきました。最初にメタデータセット（Dublin Core Metadata Element Set）が策定されました。こちらはSimple Dublin Coreとも呼ばれ、15の要素（Title、Creator、Subject、Description、Publisher、Contributor、Date、Type、Format、Identifier、Source、Language、Relation、Coverage、Rights）から成り立ちます。その後、これ

らを含む 55 要素へ拡張したのが DCMI Metadata Terms です。ここでは単に DC と呼ぶことにします。

DC は ISAD(G)2nd とは異なり、Web 上でのデータ流通・共有を目的として設計されていますので、史料目録を記述するためだけに利用されるものではなく、さらに階層的に記述していくことを想定していません。また、その性格から、RDF (Resource Description Framework) と呼ばれる Web 上のデータ資源のメタデータを記述する仕組みによるデータモデルを用いた語彙セットでもあります。ISAD(G)2nd における各階層の要素記述において DC も用いると記述自体や Web 上での流通が柔軟になっていくと考えられます。

また、人に関する語彙としては FOAF (Friend of a Friend)、空間に関しては GeoNames などが有名です。RDF データモデルによるデータ記述および Web 上での流通方法についてはほかの章を参照してください。

8. 周囲の歴史データを関連付けていく

SHIPS DB は所蔵史料目録データベースを含め、史料目録、テキスト、図像、人名、地名、文字などを主題とした 30 のデータベースで構成されています。図 5 は下記のように SHIPS DB から集めた『源頼朝下文』(T18-1-1-1) に関する歴史データを示します。

- 所在・管理：これまでに説明しました所蔵史料目録データベースに格納されているデータ。
- 一点目録：一点の古文書として記述した史料目録。この史料目録は大日本古文書ユニオンカタログにあるデータです。
- 本文：この古文書は史料編纂所刊行の『大日本古文書』に掲載されており、そこにある本文です。これは古文書フルテキストデータベースに格納されています。
- 解題：この古文書の解題（解説文）。所蔵史料目録データベースに格納されています。

所在・管理

<<fonds>>

【名称】史料編纂所所蔵史料

<<series>>

【名称】島津家文書

<<file>>

【書目ID】00104312

【請求番号】S島津家文書-1-1

【名称】歴代亀鑑(五三通)

【形態】手鑑, 1帖

【注記】年月日: 元暦二～康永三年

<<item>>

【史料名】源頼朝下文

【注記】体裁: 縦紙, 頁数: 1通, 法量:

30.5×48.2cm, 紙数: 1紙,

【和暦年月日】元暦二年六月十五日

解題

本文書は元暦元年(1184)の3日平氏の乱により没収した所領の地頭職に惟宗(こむね)忠久を補任したものである。忠久は島津氏の初代であり、同日付のもの1通とともに島津家文書のなかで最も古い。

【参考】大日本古文書 島津家文書11-1～53号、『花押かがみ』2～4、五味克夫『島津家文書の成立に関する再考察』(『西南地域史研究』2 1978)。

一点目録

【ID】XA00000012765

【和暦年月日】元暦2年6月15日

【文書名】源頼朝下文

【底本文】島津家文書 歴代亀鑑

【差出】源頼朝

【宛所】左兵衛尉惟宗忠久

(花押)〈源頼朝〉

下 伊勢國波出御厨

補任 地頭職事

左兵衛尉惟宗忠久

右件所者、故出羽守平信兼党領也、

而信兼依党謀反、令追討畢、仍任先例、

為令勤仕公役、所補地頭職也、早為後職、

可致沙汰之状如件、以下、

元暦二年六月十五日

索引・事項

【人名】出羽守／平信兼

【人名】源頼朝

【人名】左兵衛尉惟宗忠久

【地名】伊勢國／波出厨

【事項】謀反／地頭職

画像

microfilm num:1-start frame:6
URL: <https://cloimng.hi.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/ldata/718/1/10000003.jpg>

文字

【文字】例

【Unicode】4FB8

【大縦和コード】J00587

【音読み】レイ、レツ

【訓読み】たとえる、たくい、ためし

図5 多様な歴史データ

- ・ 索引・事項：大日本古文書ユニオンカタログや大日本史料総合データベース(索引)に格納されている人名、地名、事項名です。
- ・ 画像：この古文書の画像です。これは所蔵史料目録データベースから関連付けて管理しています。
- ・ 文字：電子くずし字字典データベースに格納されているデータ。

これらの関連データは史料そのもの、その史料を研究していく過程、その史料の研究結果として生じてきたデータです。そのデータを管理・利用していく上で、SHIPS DBでは史料目録データを利用しています。史料目録データと関連付けて管理していることにより、史料そのものへの参照が可能になり、それぞれのデータの根拠を示すことができます。それぞれのデータがどのような性格で、どのように管理・利用されていくか、についてはほかの章を参照してください。

9. おわりに

歴史学では史料の評価・検証、いわゆる史料批判、を根拠としながら、そこから歴史的事実を追求していくための歴史像を見出だしていきます。そのため、史料を調査・収集し、関連する歴史データを検証していくことが重要です。その中でも史料目録データは歴史データの中心であり、基礎データの中の基礎データとして位置づけていくことができます。しかしながら、史料目録データも所在や配置場所の変更、さらには史料自体の研究が進んでいくことで、史料の年代や関連する人名などが変更したり、ほかの史料とくっつけて管理したり、ひとつの史料を分けて管理したりと、史料の管理方法が変わっていくこともあります。史料の現状を記述していくことも、もちろん重要です。本文、人名・地名といった事項、文字、画像などの多様な歴史データが関連付けられていることを考えますと、史料目録データが今後も永続的に利用されていく環境が必要です。これを考慮した史料目録データを作成していくことはかなり難しいです。さまざまな歴史データがあれど、史料目録データの記述が最も難しいかもしれません。また、さまざまな機関での史料目録データを統合的に検索していくプロジェクト、例えば人間文化研究機構 nihuINT や国立国会図書館による NDL Search、では Linked Open Data に代表されるセマンティック Web 技術を用いた横断検索を実現しています。しかしながら、史料そのものの管理体系は、残念ながら情報技術だけでは解決し得ない現状にあります。そのため史料や歴史の研究を進めていく中で、その成果を永続的に提供できる環境の整備は今後も不可欠だと考えられます。

——参考文献（Web ページはいずれも 2018-10-01 参照）

- » 『デジタル大辞泉』小学館, <http://daijisen.jp/digital/index.html>.
- » 東京大学史料編纂所ウェブサイト, <https://www.hi.u-tokyo.ac.jp/>.
- » 近藤成一「21 万通の古文書を集める」、『歴史知識学はじめ』勉誠出版、2009 年。
- » 「史料編纂所の歴史とその課題」、東京大学史料編纂所編『歴史学と史料研究』山川出版社、2003 年。
- » 国際十進分類法, <https://ja.wikipedia.org/wiki/国際十進分類法>.
- » デューイ十進分類法, <https://ja.wikipedia.org/wiki/デューイ十進分類法>.

- » 日本十進分類法, [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 日本十進分類法](https://ja.wikipedia.org/wiki/日本十進分類法).
- » 国立国会図書館分類表, [https://ja.wikipedia.org/wiki/ 国立国会図書館分類表](https://ja.wikipedia.org/wiki/国立国会図書館分類表).
- » ISAD(G): General International Standard Archival Description - Second edition, <https://www.ica.org/en/isadg-general-international-standard-archival-description-second-edition>.
- » 国文学研究資料館（アーカイブズ研究系）編『アーカイブズ情報の共有化に向けて』岩田書院、2010年。
- » 山本博文, 東京大学史料編纂所蔵島津家文書の情報化, <http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/limedio/dlam/B95/B952215/1/vol02/pdf/3401.pdf>.
- » 加藤友康, WWWサーバによる日本史データベースのマルチメディア化と公開に関する研究, 1999, <http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/personal/kato/index.htm>.
- » EAD3, <https://github.com/SAA-SDT/EAD3/tree/v1.1.0>.
- » 国立公文書館デジタルアーカイブについて, 国立公文書館, http://www.archives.go.jp/owning/d_archive/index.html.
- » Dublin Core Metadata Initiative, <http://dublincore.org/>.
- » Dublin Core, https://en.wikipedia.org/wiki/Dublin_Core.
- » FOAF, <http://www.foaf-project.org/>.
- » GeoNames, <http://www.geonames.org/>.
- » 東京大学史料編纂所データベース検索サービス, <https://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>.
- » Tim Berners-Lee, Linked Data - Design Issues, <https://www.w3.org/DesignIssues/LinkedData.html>.
- » Linked Data – Connect Distributed Data across the Web, <http://linkeddata.org/>.
- » nihiINT, <https://int.nihu.jp/>.
- » 国立国会図書館サーチ (NDL Search) , <http://iss.ndl.go.jp/>.